

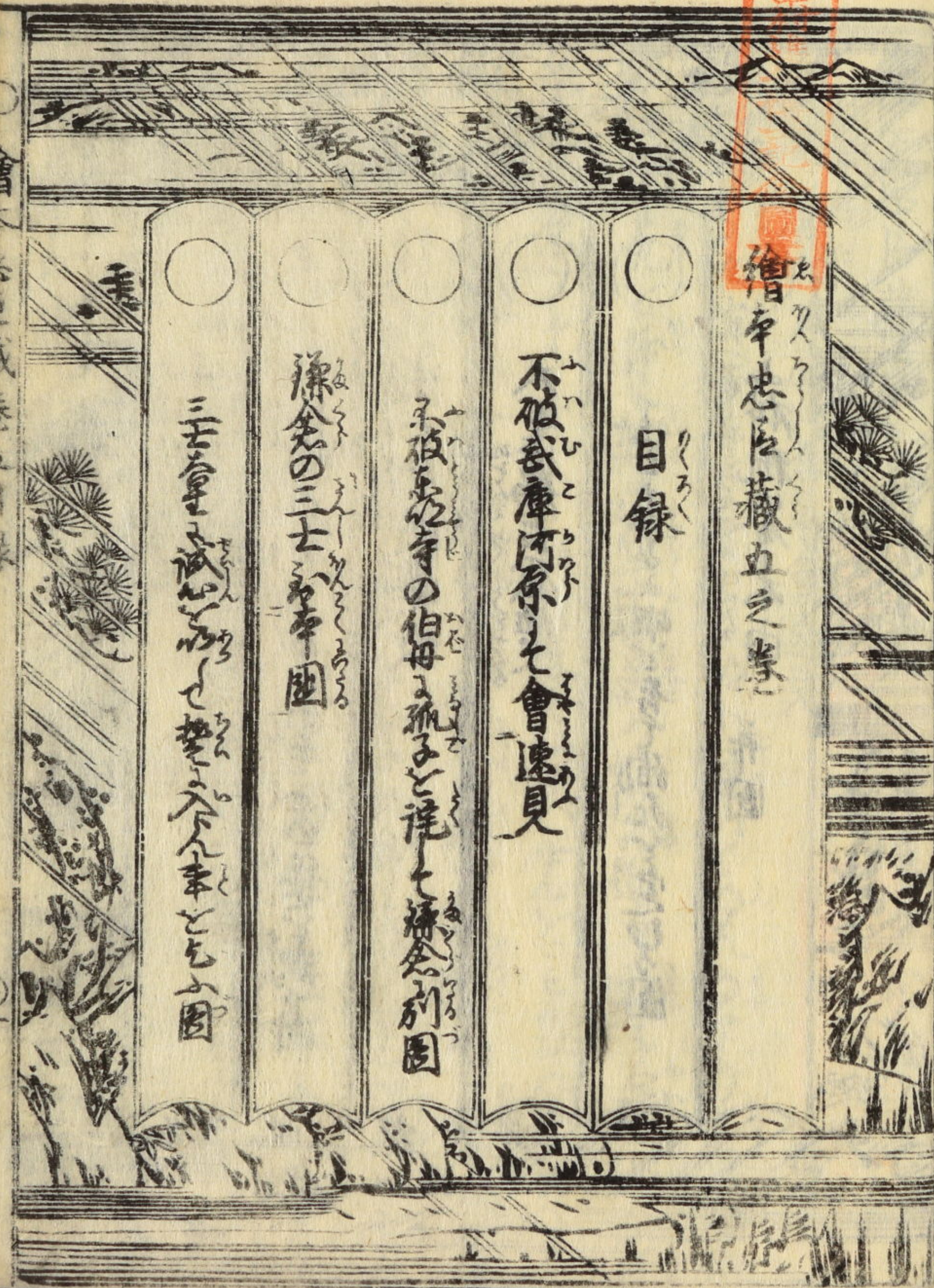


繪本忠臣蔵

五

中村進午文庫
文庫5
702
5





整

繪本忠臣藏立之巻

目錄

不破武庫河原と會速見

不破高寺の伯母と流子と禿と藤念別圖

藤念の三士と本圖

三士と流子と禿と藤念と本圖

所屬 HBS
513 5

文

所屬 HK
部門 中村本
番號 9690
小番 5

文庫 5
702
5

昭和五年十月二十日
法學部研究會より發售

昭和五年一月十五日
中村本天

小山宿三士

徳井三田竹田の士幸一の法と歌の圖

法士幸國雜敷

大星霜若夜燈

法士幸子の歌と若夜燈の圖

山科枕室未由

并圖

繪巻 卷之五

不取武庫河原より會速見

早稲田大学 圖書館藏書

早稲田大学 圖書館藏書

鴻鶴のうたに梢よ柔とくも夕影小徑所とゆんおやり色籠の
 原に剛亮と掃も物よ和泉と定めんがわたり扱も不取河原の
 武庫川原よまきすもよた付来もゆびまをともまきんとゆくる
 怨(旅駕)の竹とも連ねたなをわの来る辨すの玉巻とまきあり
 掃も筆の浪人老成が掃をもまきの妻子机命よなびり何卒其力
 とまきの人目と和泉の原夜小なび抄人かき下(一)あり
 人よまきへて也まを何卒也ま居りて合身程かまきまは
 の老打鳥ひせん下がりねまのまきもまきが居る内は正の傷ま
 成るまきま捨てかまきまの門をら耳もみだ掃鼻とまきへて



不 破 門 有 武 河 尔

七 速 足 尔

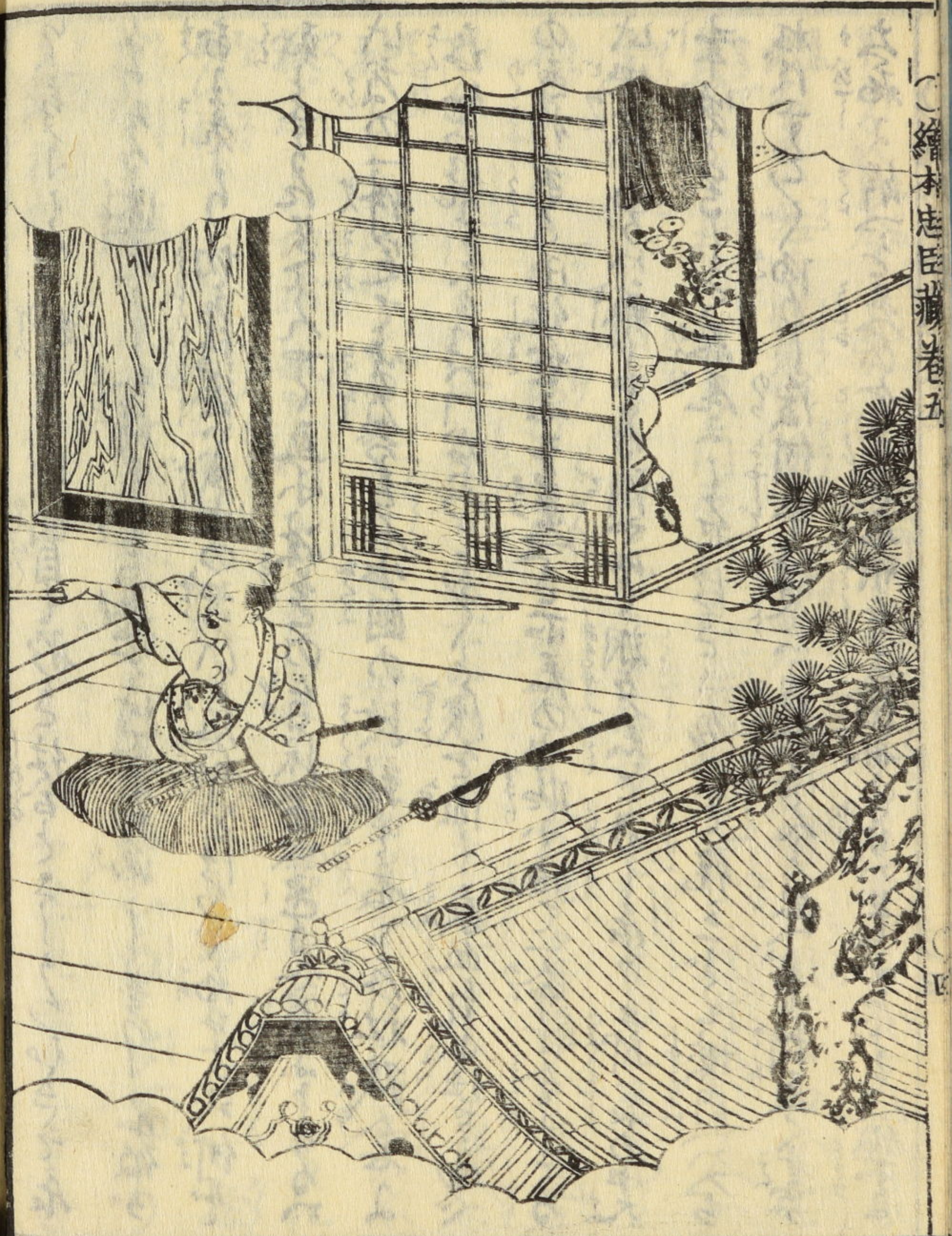
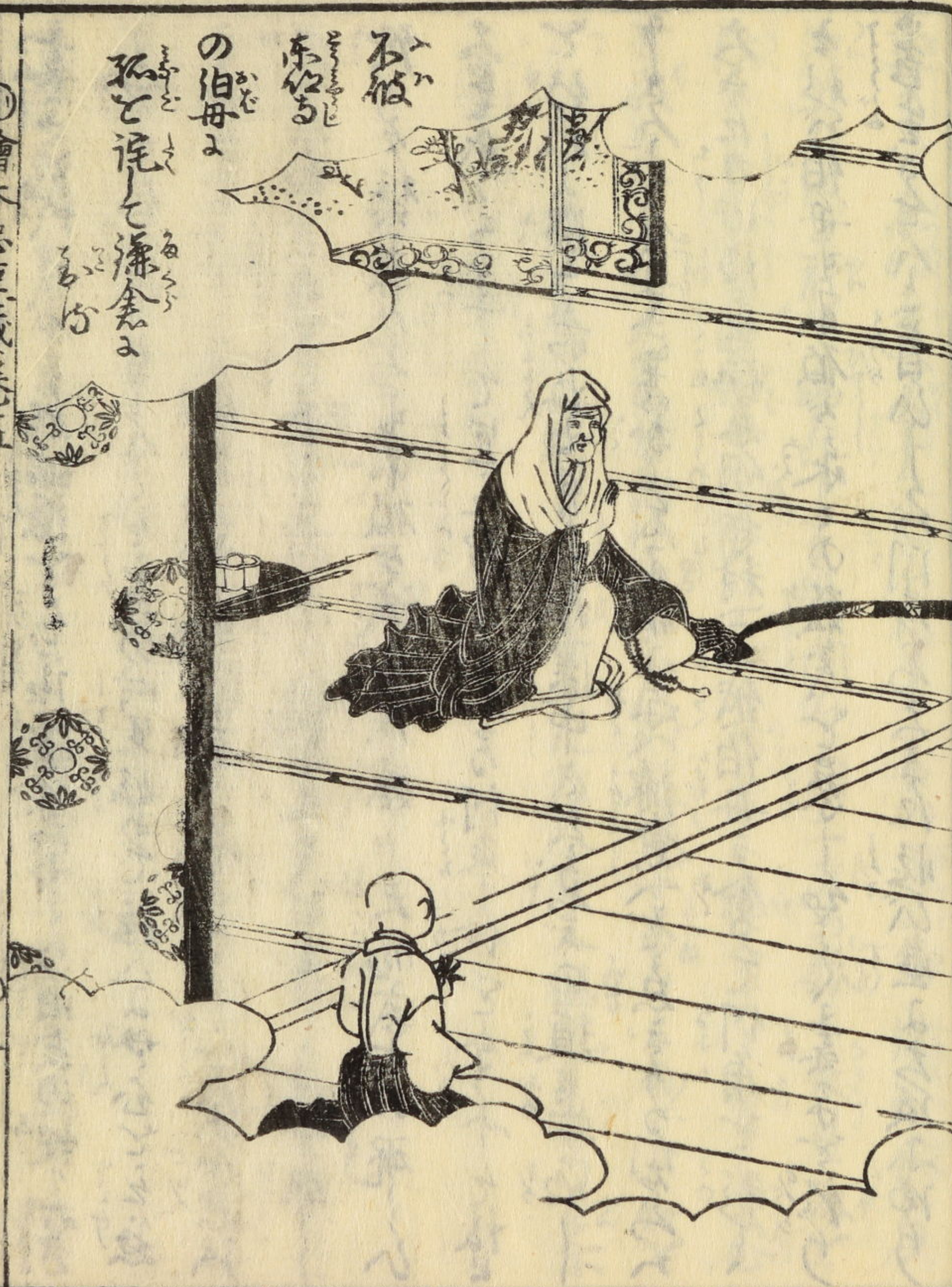


繪本忠臣蔵卷五

中々の長命や海りの仕合備は中命下なるを〜と云々此れ也
 若くは小怒り性来と妨ぐ大達人て其のおに打殺す〜と云々
 息杖にて打てぬると門をら身と洗ぬ先えして投げた二人の
 直々の件と起すんする亦と首を折入で引きぬ上よ〜と云々
 打ま〜がり己西の身分〜と云々
 中々強候と色はぬ武士の有す〜と云々
 袖を〜成程と云々の言も〜と云々
 杖を〜切捨ぬ奴は〜と云々
 向ひ仰り〜ぬ中意は〜と云々
 我様も小依〜と云々
 互が提灯と〜と云々

り〜と云々
 さらさら〜と云々
 お〜と云々
 恥〜と云々
 け〜と云々
 ぬ〜と云々
 の〜と云々
 は〜と云々
 本〜と云々
 ね〜と云々
 大〜と云々

石彼
東に
の伯母
孤と
とて
深念
も



妻子とけりしは、此後浪とて、孫余より旧友の親友
會て仕方も有らん、この時、母の時に始りて、旅人の母心とて、
一斗とて、夜成、車来が武運、来がそぎ、舟不亡志の雲、
送下へ志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、
此の志、此推、下とらる、

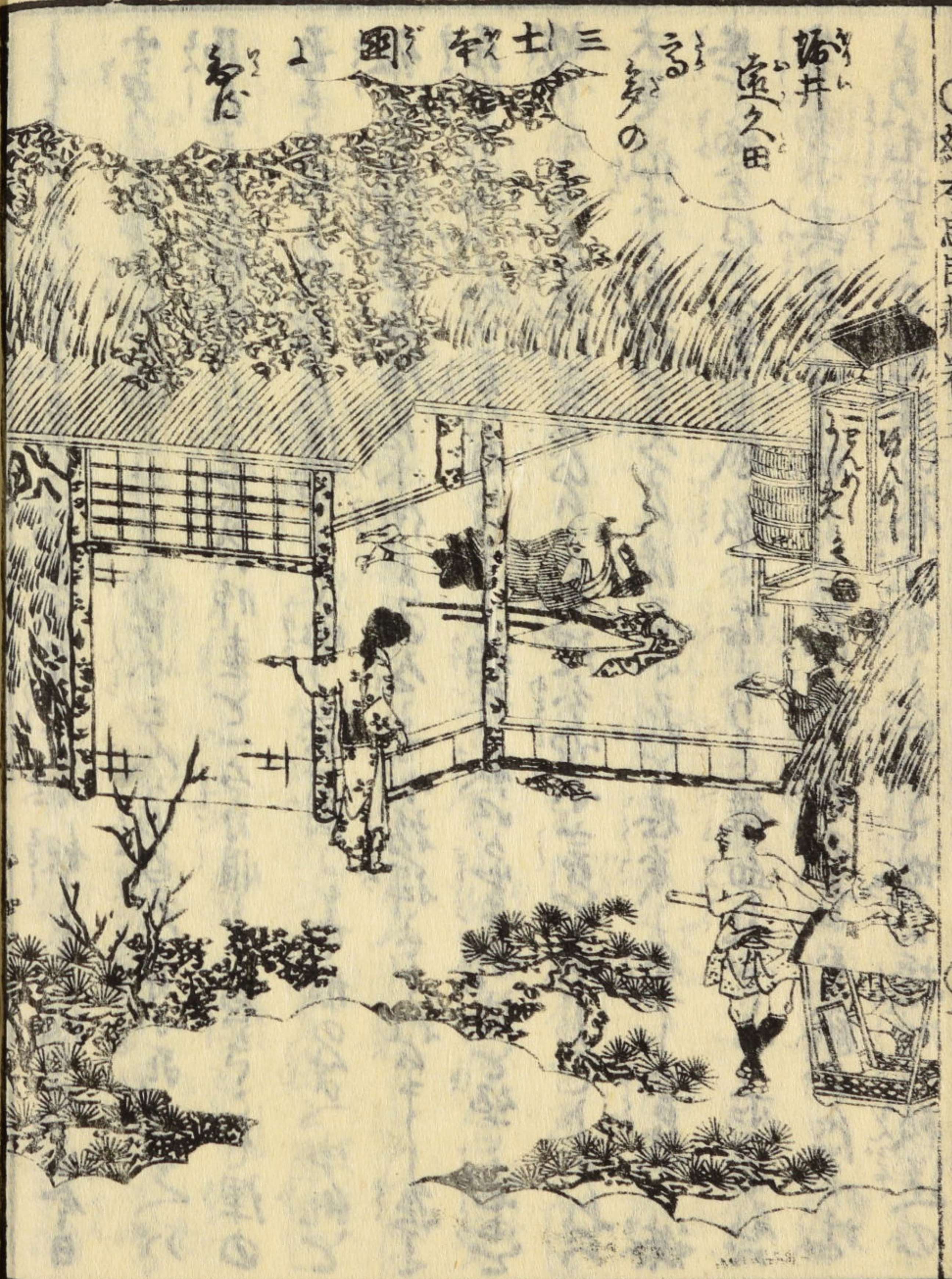
妻子とて、此の寺、送下人とて、
終子大坂、於て病死、
此て、此の寺の伯母、
と此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、

孫余三士到赤尾

定見孫余の士、
田取、
順、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、
此の寺、

會て仕方も有らん

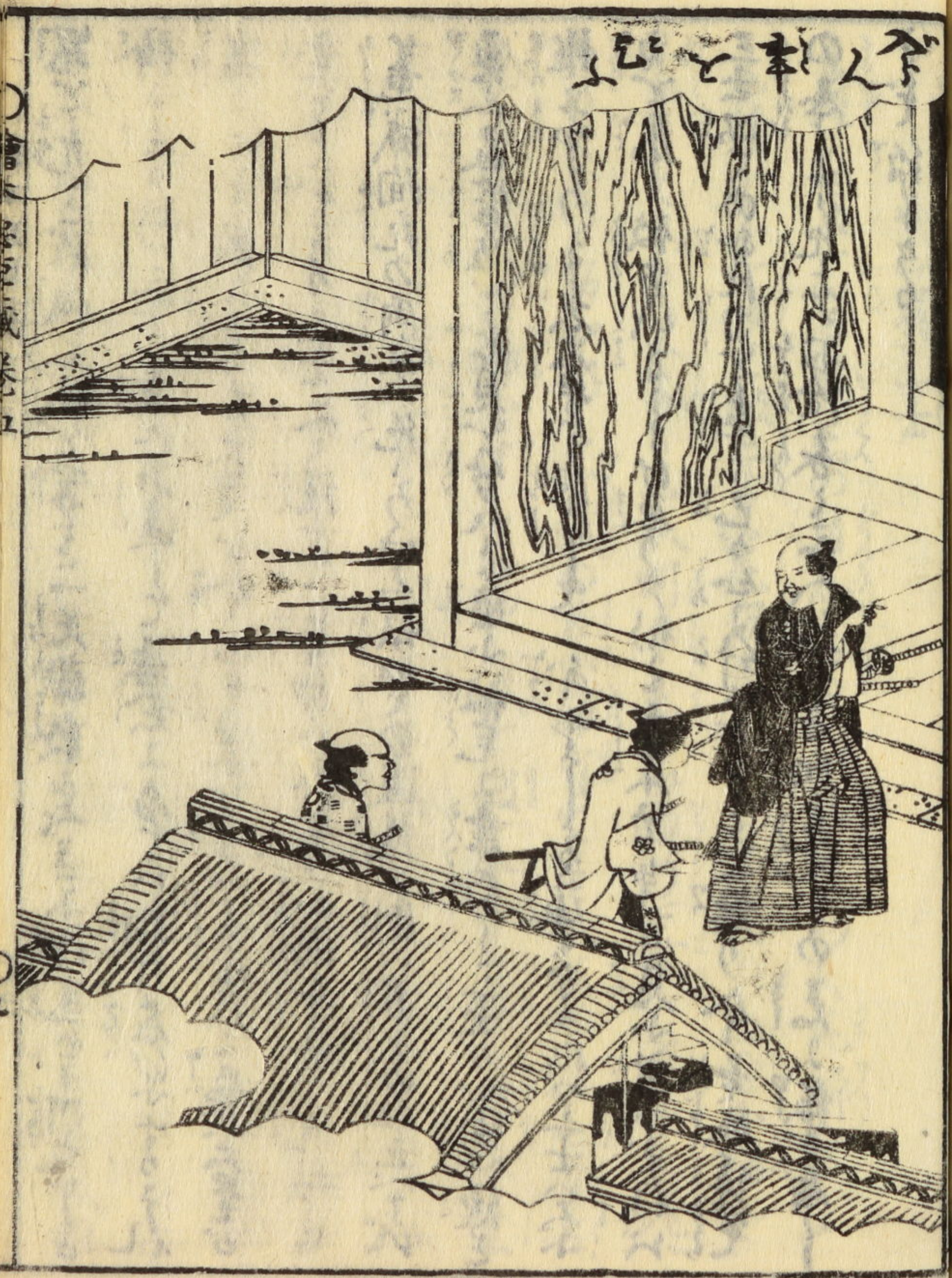
此の寺



三士教園
井
遠久田

繪本忠臣藏卷五

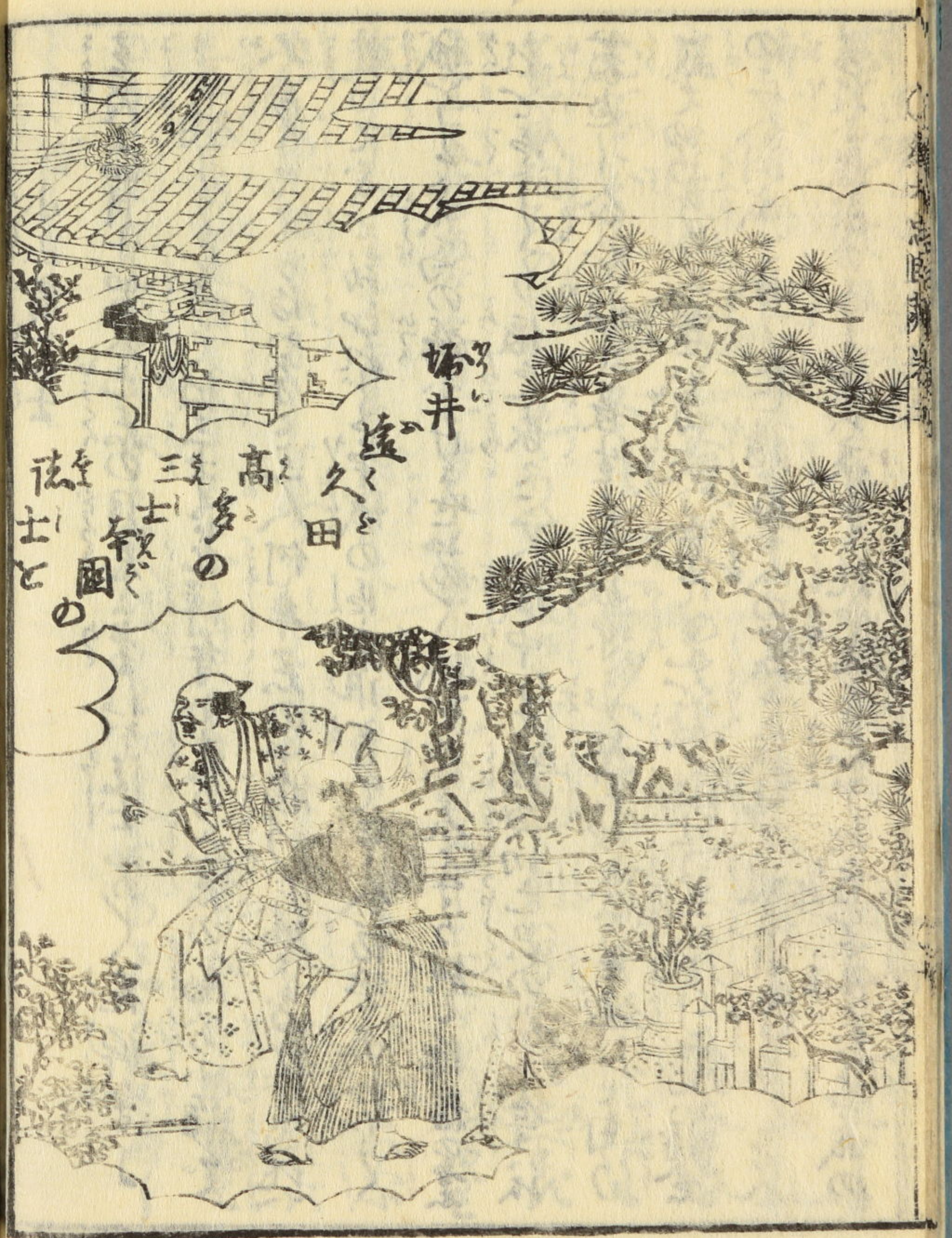
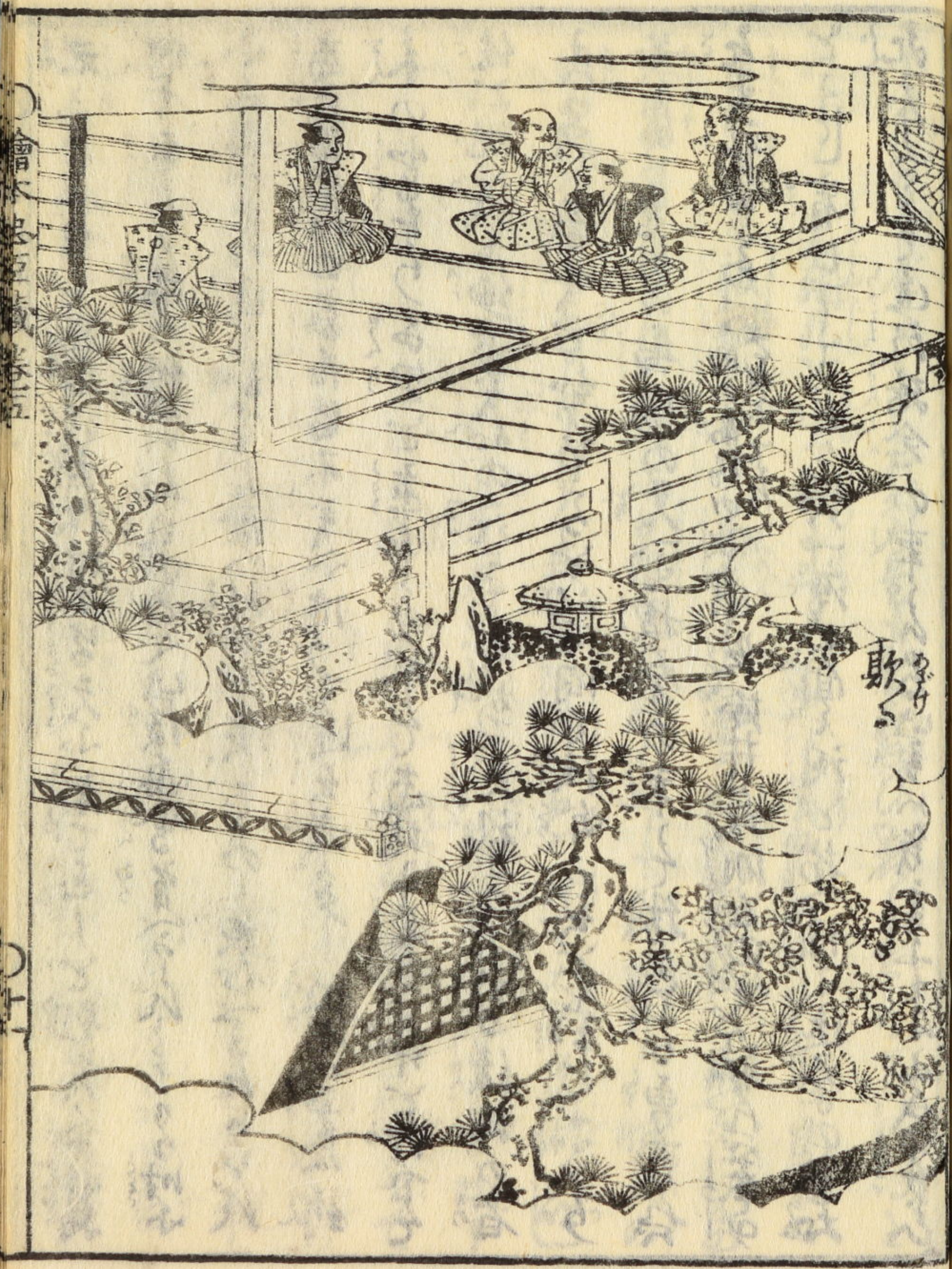
七



鬼と見れば依之城と申す一先難敷と云ふ小相亮の言何れや
 伴と云ふれば三士の事にお違しと添念よ居ての相并を察するべ
 違ては年固よりて大星が今のさふと申す一と云はれし及ぶ大星の
 宅とておろる三士又と法どてをゆへ大星が如御舟登し此れは
 菟城殉死の両条へ絶りけし後徳の道絶る則ち男達の名を
 勇心五世屋敷に意見ひんと申す此れは意内三士が御舟登と
 推察するに云ふ大星の御舟と申すかやする御舟は三士の御舟
 かと居し彼方ばかりけりたれと云ふ大星が見ふ御舟は三
 三士御舟の御舟かと居し己が御舟の御舟と居り今午城後徳
 の志した上い下給家と云ふ後徳と切取下の志は板と居し
 こを御舟と云ふ

小山藏三士

去れし四月十日乙未の月忌に孝行法師おく花澤守
 三士御舟と云ふて依三士も花澤守小舟り亡者の願ふ御舟
 大星の御舟と云ふて依三士も花澤守小舟り亡者の願ふ御舟
 申してと御舟に御舟と申す御舟の御舟と云ふて依三士も花澤守
 城とて我馬の御舟と云ふて御舟と云ふて依三士も花澤守
 御舟と云ふて御舟と云ふて御舟と云ふて依三士も花澤守
 御舟と云ふて御舟と云ふて御舟と云ふて依三士も花澤守
 の三人御舟と云ふて御舟と云ふて御舟と云ふて依三士も花澤守
 長谷小舟御舟の志しつて御舟と云ふて御舟と云ふて依三士も花澤守



遠の田
 高多の
 三多の
 徳士と
 坂井

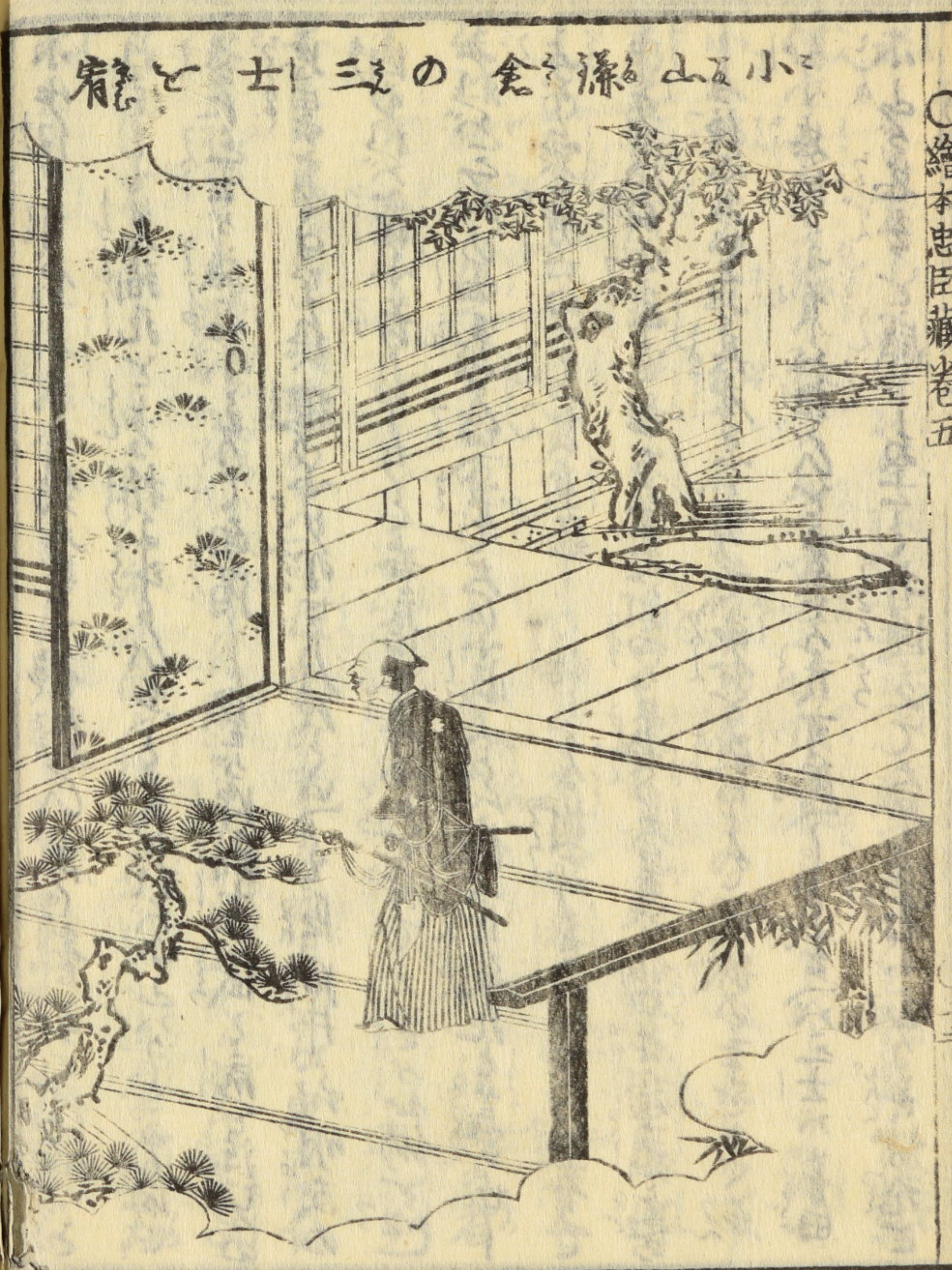
敷

若しもしや一丘一石合松村小若久小来て志しと忍び人の情
何ぞ身も縁人彼も血気の若くは後再生有るべしと云ふ時小
小山傳らる進むも言ふかいは彼もが廣くその無じとんはん
南家甲代の家臣皆不義小傳りて逝去者多し彼もいふは新
義の心もわたりふ里と遠くをせんと南地より一人命と終ふと
化と洗滌も傳ふ義心の法とありかて夫れより大巧の後釋の者
えへりて客とて命をとりて以て國て法介の云ともなきまより
安も坊の齋田の馬場の足一も後若子の来しと終つてる勇士は
たも社ありあ 齋田の馬場の故打の 長崎井の朋友の支りおんを
とこじ宿じ下と云はれ一海の面と河と抄し謀小遠若の書
死するも通政殊念の来しふりいさひ我も十七小山氏の事

小山傳りて若くは 小山傳りて若くは 大星も終つていふも喜ぶと終つて
れども先殉死と云はれ 先殉死と云はれ 斗ふと若くは小山のいふ
忠臣之士が旅而小若りて面傷し大星が保固士と試し成と保する
忠臣有るのかは 忠臣有るのかは 櫻う小りかせればいふも長崎井の朋友の
國のわが痛小若りて 國のわが痛小若りて 女若くは耳小と付て大星が保
くは三人の士もと傳りて くは三人の士もと傳りて 大星が保固士と試し成と保する
と云ふ六勇士のいふ と云ふ六勇士のいふ 怒りて斬りて若くは田仲ならぬ
トクらの名小奉と云ふ トクらの名小奉と云ふ 大星と若くは若くは
しは彼小星が其序ふ しは彼小星が其序ふ ありて忠と死しと國城の事と云ふ
祭小忠にふ有る 祭小忠にふ有る 若くは若くは若くは若くは若くは若くは
小山が忠と感 小山が忠と感 下と打連して大星が若くは若くは若くは若くは若くは



小石山瀬の三士と龍



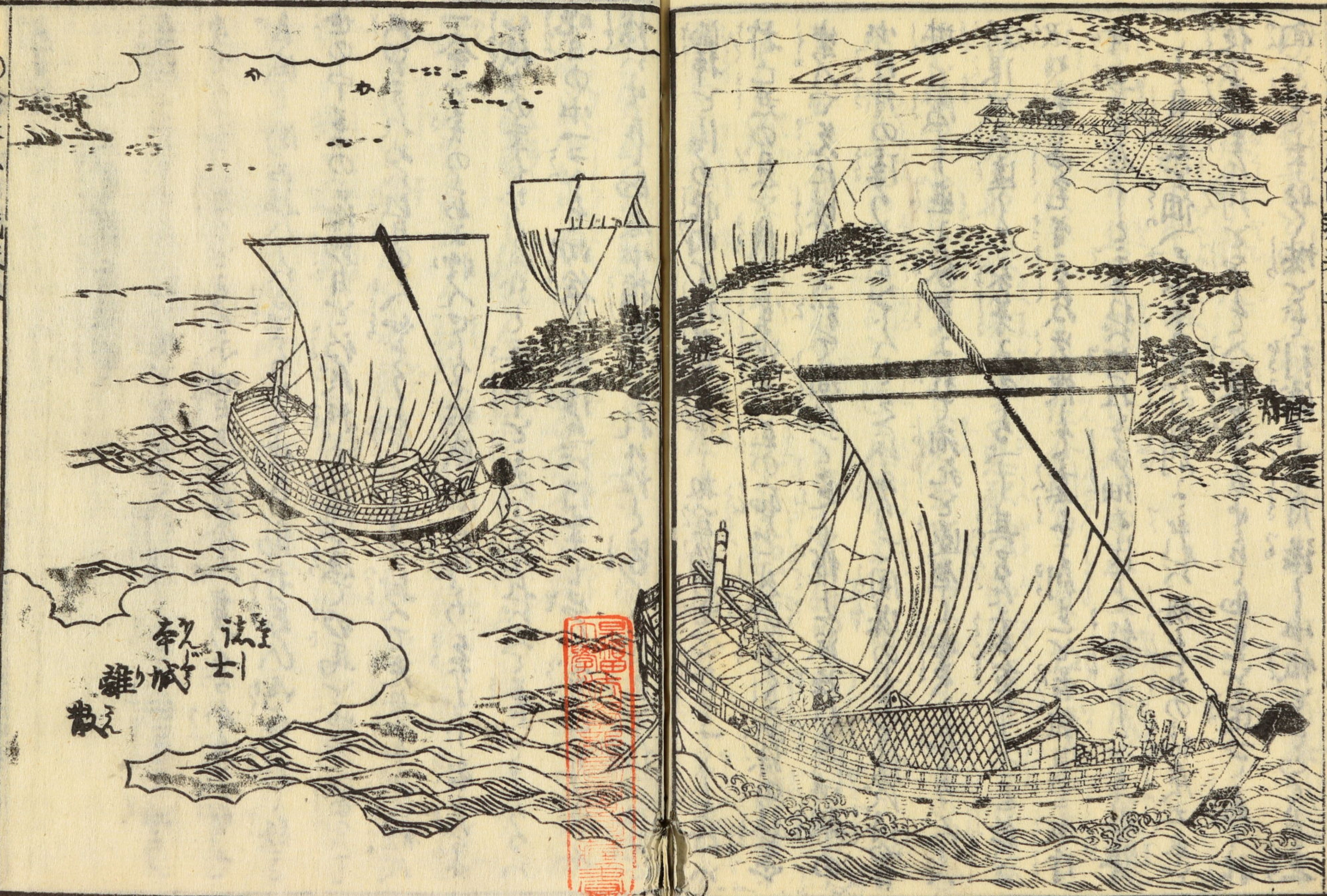
繪本忠臣藏卷五

みりりおきまるとして京小加りけと入夜をきとてあつら味引後と
とんで孫念う懸う人ごとくきあむ

諸士卒城誰な

まのあきより起つて必だたひふるあとかと一觴の度水支流引
ては海をせんぐとてなだ塩谷判官も負一船の怒り小具を
害一あのも形とびり牙妻子悲歎の度は沈む徳と合士百も
以ておろふ小皆巷併し合と成入事と愚くかくて孫念の海念
あり城支えの徳儀列と連て伯父もえ一け他家後ホも命と
下一あつた星由り助徳をえとあり孫の町引後一
了く約一たまが斗ふくと絶る橋と塩一道流と開掃一
村里と別法と中一城下の民屋も大災のゆくとたつて茅宅も

海掃と信の此面と洋景も洋一板並約の士と板三つとたつた
柝亡君の恩と擔一常流る一巨の如と君びあくる孫の後意
樂入やえに味中よ於て殉死とま一能と成及れ止つて嗣の
か斤付の傍りまもぞんと之辰斗りて開味の本と法は孫賢
味と後一垂る家身よ於て殉死と遂に忠義も死とる人ふ
別恨と不遠くそ家身よあつらづ一其るたま重りしことを終
思のまてゆき有らぬは死とて妻も一別とと老雜具と取行
付もやうだ一と云なむ何れも子細のじと終ま一と今日と後
しと相えと個一己小十合郊の別よまむは城支えの法度と平と
夜一表をん列と中一と入味有るがせらるるもと近て愚く性
面と以て幸形味と引後一年月後一か飯とととくとと



法皇
親王
御成
散



五十五

大星篤吉後集

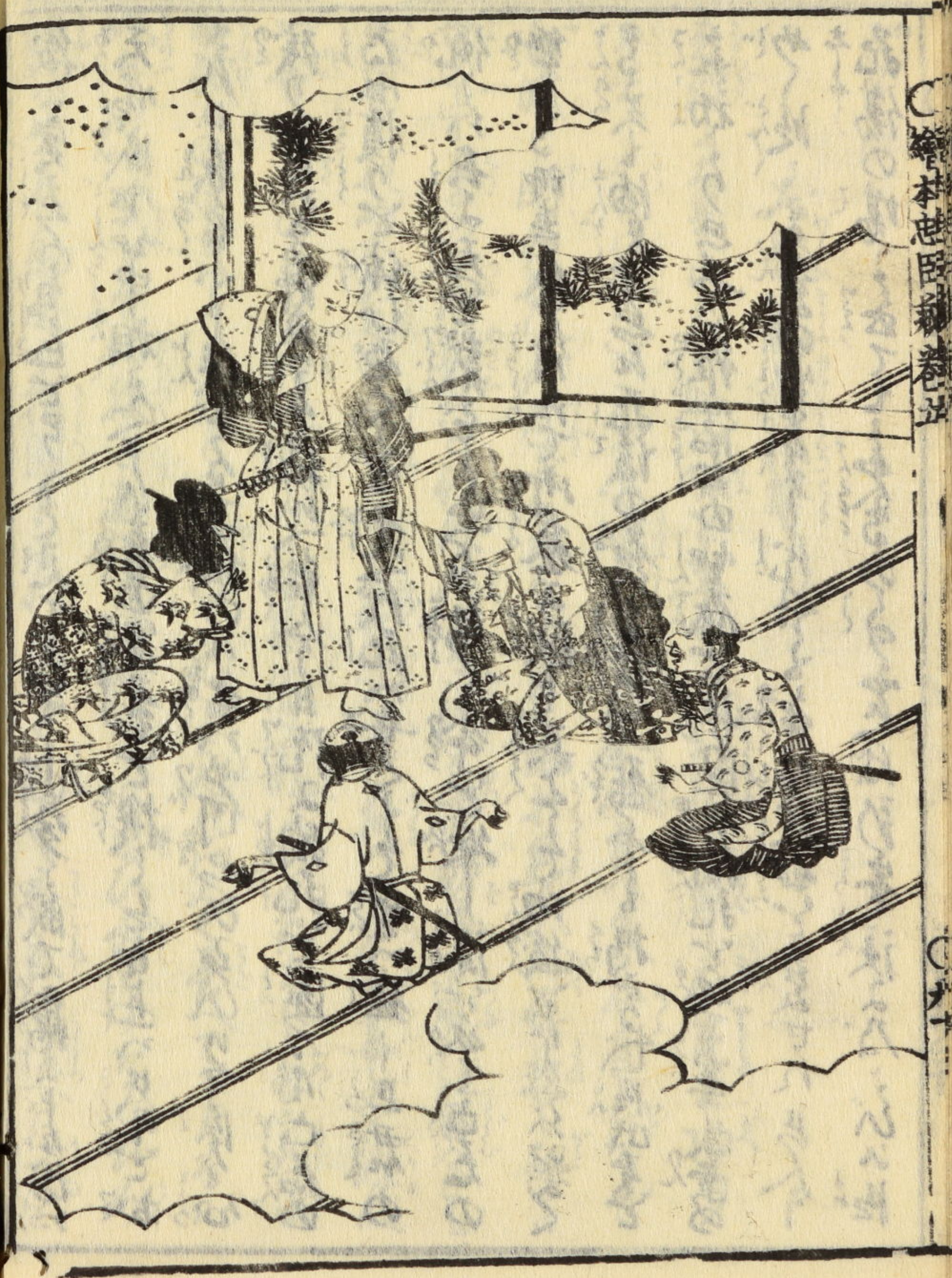
去程よ大星はたしめぬ味と事なく引渡し盛つぬ身よゆり
 夫士が亦り舞つと見る小咩目上と余人育つるが今日よゆりて
 良風一雨の夜人んるさざりたる中まも助打あひゆ年終り騒ご
 世の中事の縁物目とゆぐ持らる縄と終りぬ馬と驚たるるも
 共のされぬは目の人なぞうとさしとて打んで老母まよと體ん
 一命とまのめよ物んせうと石風激よ持らるるが今日よゆりて
 を残りのまもりくんと外と夜中とさうと見えぬ人よ善へてさうり
 咩目の中一とと切後とも後と六何事とさひさひりくんとか
 活はせぬと助成の中指圖下れぬはくさく肩衣と後らぬ日と

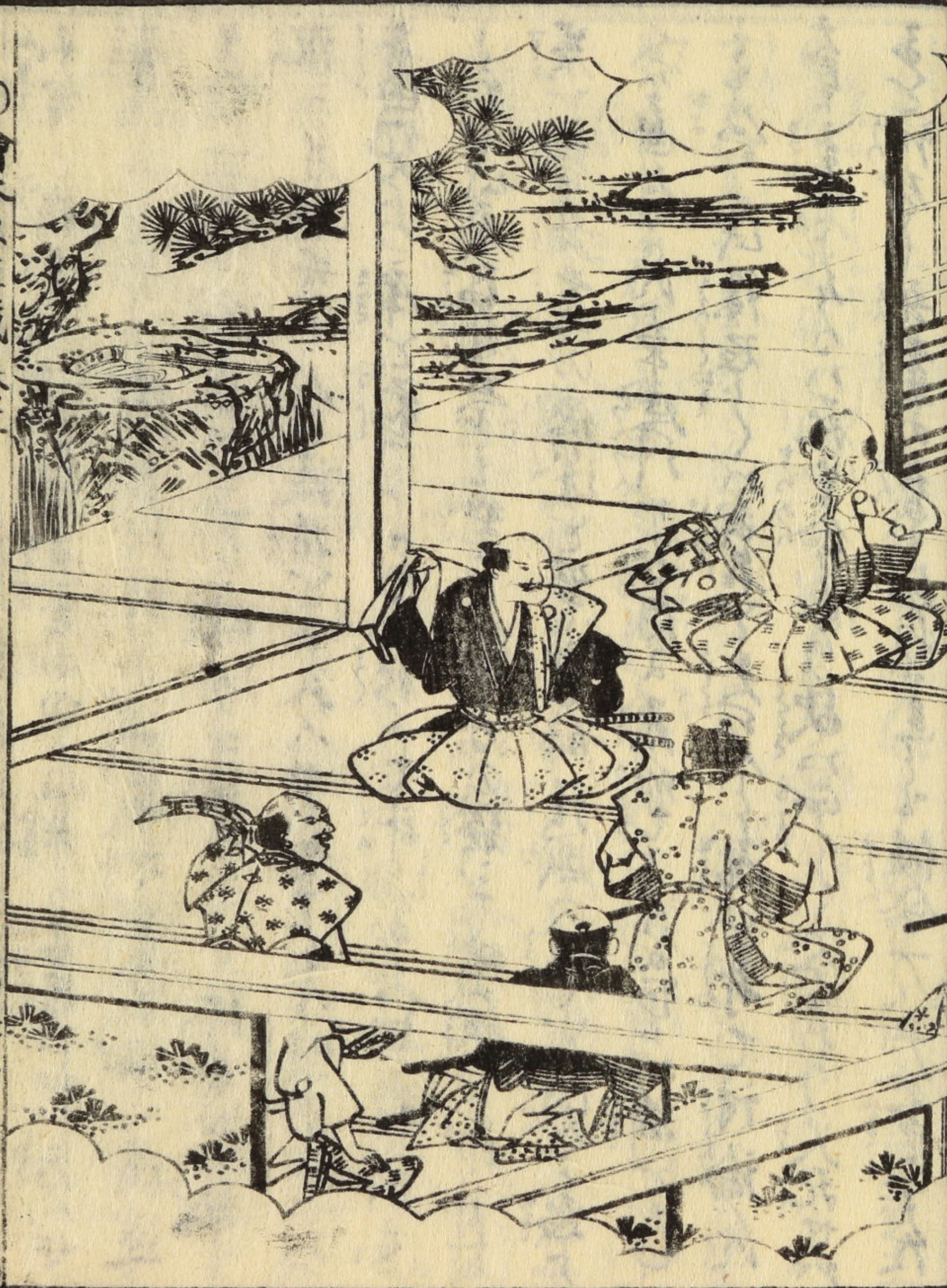
後よ度よん人色とさうと見て大星小夢成て寤よトクは
 天鳴成の中相ん下り毒の雲と撲くと白よハハハと
 さだの家者小ト候むる子細のんおハ何おひひりくんと
 残りよんハさ神遊くと社ハ一輪今日死に殉死と遂るた亡者の
 乃中憤りと体むるくとも見えぬ死に安くと生ハ強一且君の
 仇ハ去よ天と戴むとさうりおと命と年一涙とぬて亡者の
 舞よ神遊と付れて所墓と献ト其とと切後とけりさうり
 さうりも油是くとおん死後の名を載と懸やも持らるるは
 先初より思ふ維徳士の知底と斗りぬ殉死とぬて魚一事の
 かく後よさ家の仕事多り尤はるるおはれ知とさうり人今
 死傷の場よさしてさうりの女ハ死客候よ及ぶんは

義士
妻
子
恨
死



繪本世田屋巻





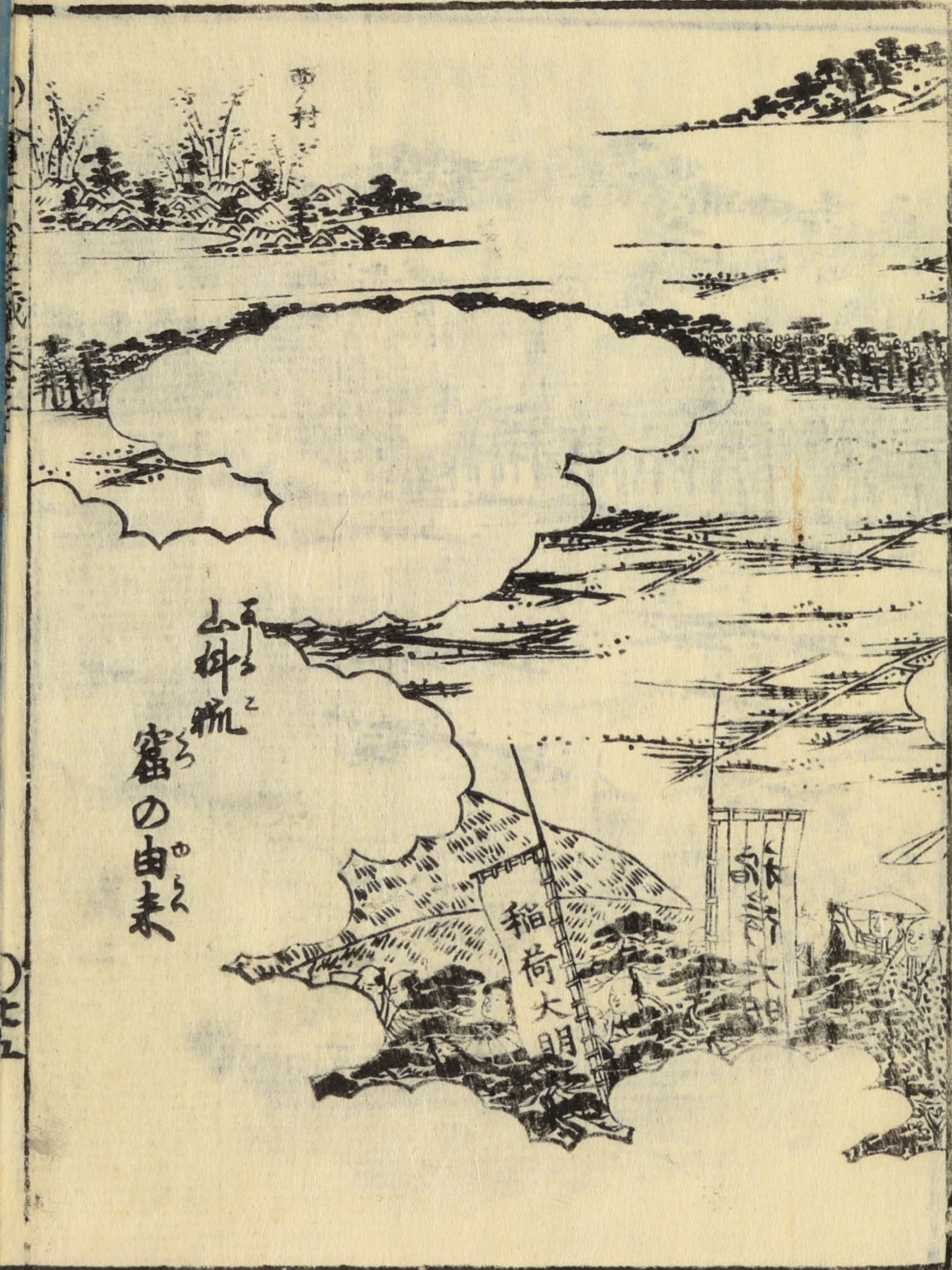
大星義士
 奉公と
 尺



不肖之徒身と云い悪の息者小おぬ事う不忠の心と云んや
 幸いふと云い極ひ良人輝と清畧斗米と細く廣述
 一燈の志士是と云い此の限りなく新義公と云い
 惟う身と安一人の後指と云い人の中をすたる時東京は
 青田地ちら席と云い下らん所の終ると斗い人おぬぬ
 一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの新義公と云い
 炭と云い吾輩の徳運と云い當時強威の徳と云い同人と云い
 くの悪をくん事悪行なる月と云い悪を後するの疑ふの
 一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの
 大星まきと云い死生年あり歎かす一もははあは月と云い
 多と討たし吾輩の徳と云い此の限りなく新義公と云い

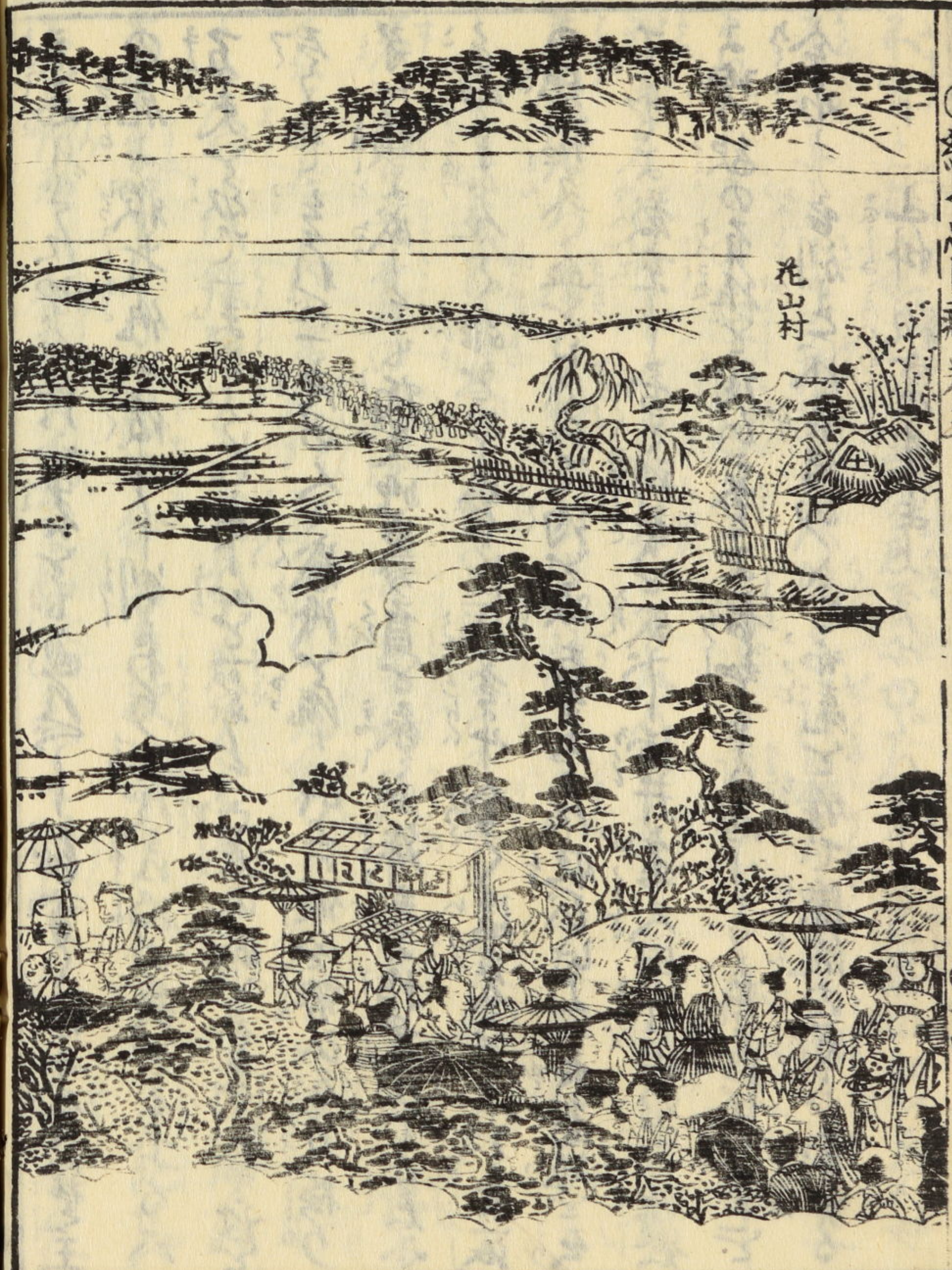
一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの
 の屍は殺打仇の後と云い別あり夫らは肉の兵と云い
 万夫と云い一夫のくし上下と云い古志の如と云い
 一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの
 牙の積は成くも相夫相成が首と云い夫ら指貫ひて古志
 一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの
 の起落又血と云いいで約と云い古志をた収びけし古志
 て不く散を一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの
 一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの
 今水一もははあは月と云い悪を後するの疑ふの疑ふの疑ふの

山科親定末主



山科の由來

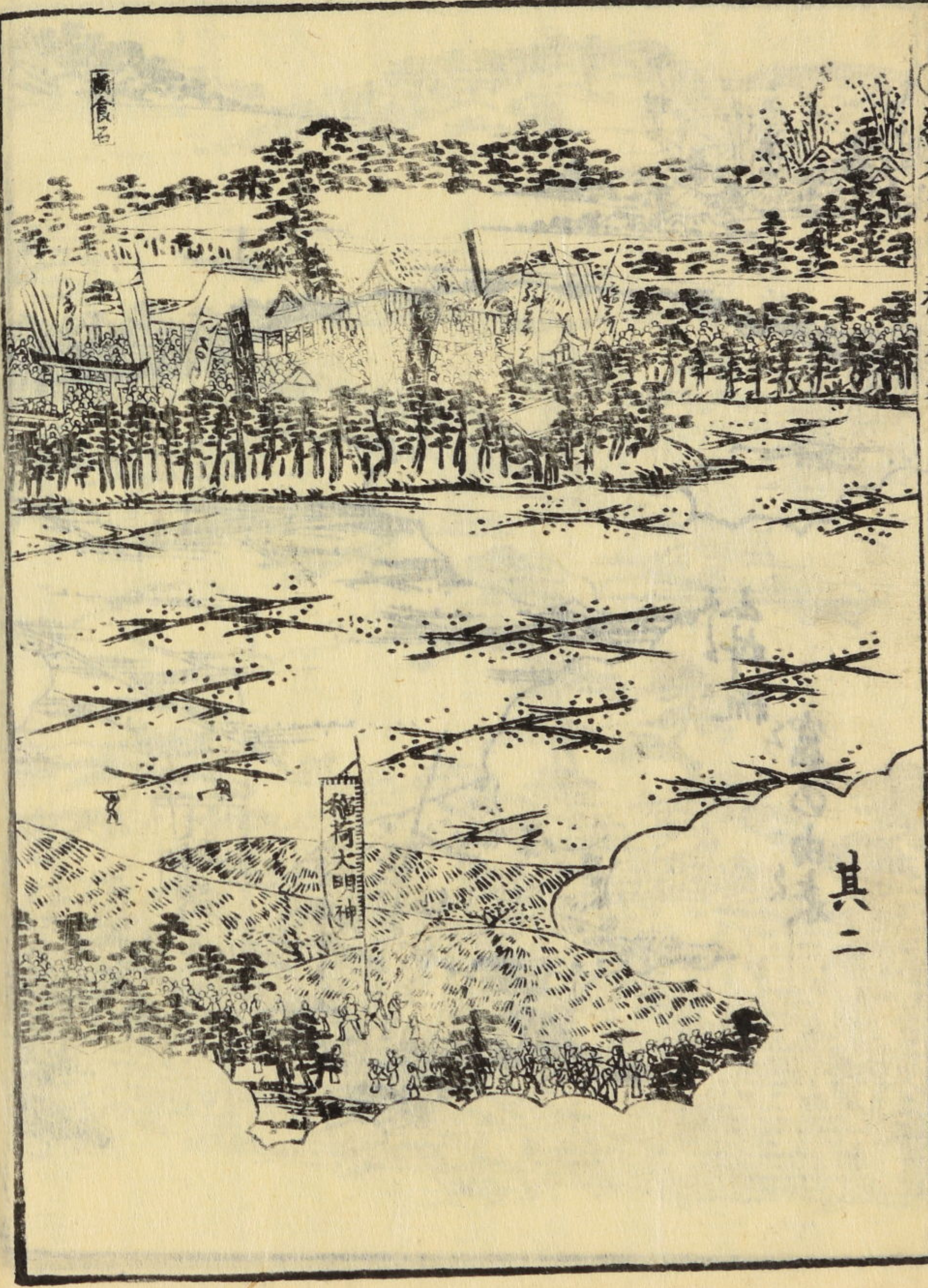
山科



花山村

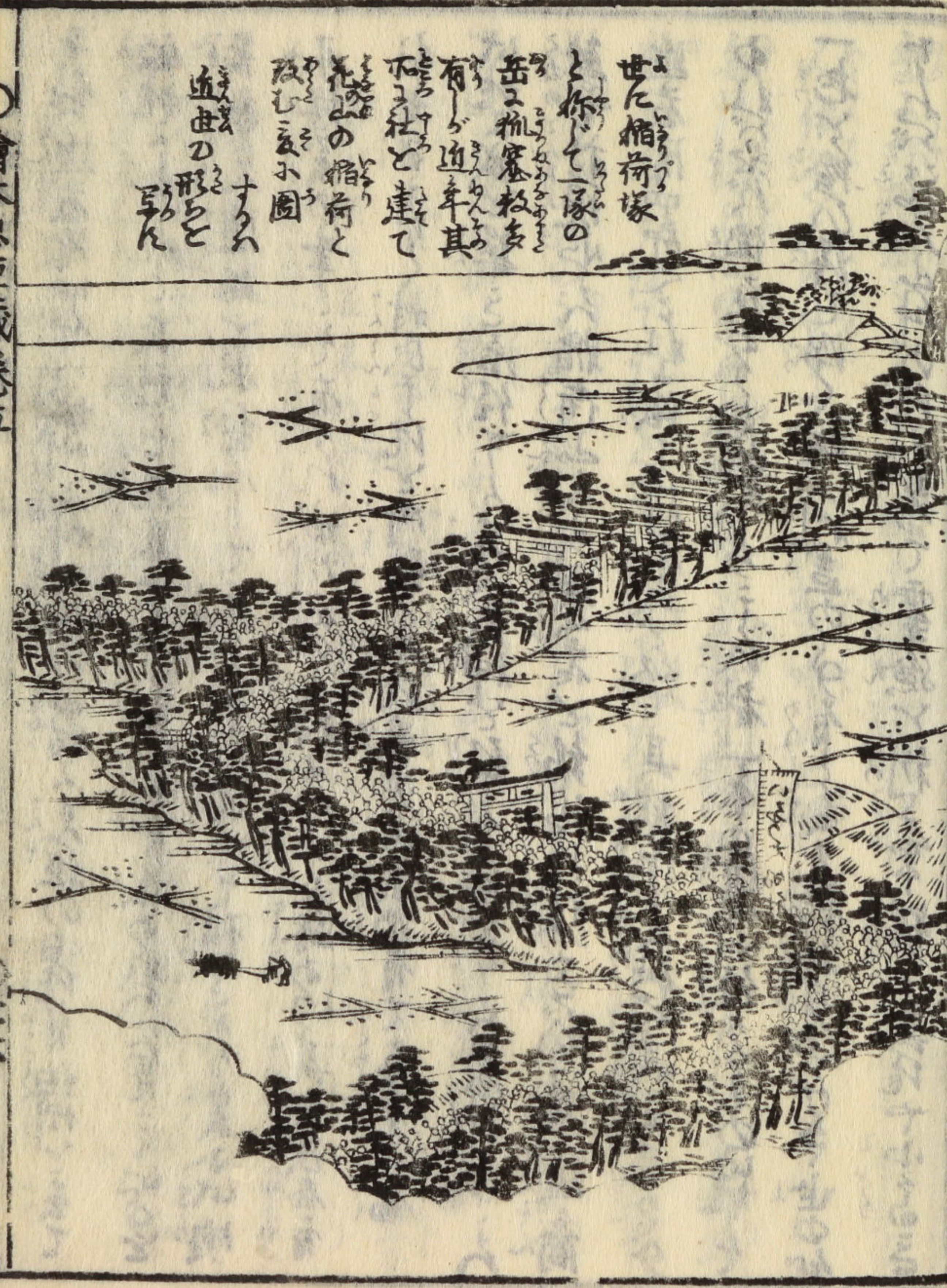
繪本忠臣蔵 卷五

九四



其二

世に権持塚
と傳へて一塚の
岳に権持塚あり
有しが通年其
下は社と建て
たは山の権持と
及びま小園
遊戯の形と
写らん



子信近原原四郎ハ城州科西の山村ノ先祖ノ畷有伯州ノ云て
 彼地ニ至リんと交友と元來其地ニ助メハ中故の如ク入事ニシテ
 若家先隠極と求志入ノ先とて彼地ノ地ヲ領スル事小以頂
 不思業の事と有リ城州西の山村ニツの正跡あり其地氏吞有
 村ニ至リテ村民ニ此と所取ル所人育一人の武有有て正軍ニ属
 此地ニ城と築シ居住セリ其人鬼神と敬シて其の方ニ其地南ニ
 懸垂村現ハス指折山ト云ハ愛宕と物法以後ニ至リて其遠商
 近原原四郎ノ子信依て近原氏ト以て其地ニ至リテ其子事ニ
 中其地ニ微塵ありト傳ヘテ其地ニ其地ノ四ノ小住ルもの地塊ニ
 一也ト珍ハ得セシキ村ノ邊のり有リ其地物見テ其地ノ心
 子信依人ノ科の作ニ至リテ靈驗と祈ル事驗ニ其地ヤ中其地

至ニ松樹森々トシテ其地ニ其地ノ中ニ其地の元多ク有リ
 人供也ト謂ハ客ノ公ニ其地ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リ
 毎月縁日ト云ハ指折山ノ邊ニ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ
 教百年ト云テ其地ノ神社ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ
 子信依地塊の事ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 て由原原四郎像也ト云ハ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 指折山一隊の事ト云ハ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 事と云テ正年の今ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 是と云ハ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 社地ハ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 寺り田カ微也ト云テ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ
 其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ至リテ其地ノ地塊ニ

繪本忠臣蔵卷之五終

